

ISおじさん

サンバガラス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界から帰って来たおじさんは1年後、まさか2回目の学園生活をおくるのだった。おじさんは青春にどう立ち向かうのか!?

「そんな事より皆さんでセガサターンやろう!!!」

※因みに作者はSEGAゲームをあんまり知りません。龍が如くはやった事ありませんけどね(笑)。なので、出来る限り調べます。許して

# 目次

第一話	クラスメイトは全員年下。まるで留年したみたいだ。	1
第二話	ISとも意思疎通出来るみたいだ	6
第三話	国の代表みたいなやつじゃ無いのか？俺も全く知らんけど。	10
第四話	貴様、セガを馬鹿にしたな!! 望み通り決闘してやる!!	15
第五話	君と出会えたのは運命だな。	21
第六話	バーチャロンはロボットゲームのジंकスを打ち破ったんですよ!!	55
第七話	このISをテムジンを舐めるなよ	30
第八話	セシリアはおじさん恐怖症になったのだ。	36
第九話	やっぱ、おじさんより若い一夏君の方が花があるからね	41
第十話	約束を忘れて無いんだろ？それは一夏君は悪く無いぞ	46
第十一話	俺じゃ無かったら死んできたぞ	50
第十二話	俺の（友人としての）気持ちだ。	55

第十三話 友人として見過ごせない。

59

第一話 クラスメイトは全員年下。まるで留年したみたいだ。

「インフィニット・ストラトス」(Infinite Stratos)、通称「IS」は天才であり天災の発明家篠ノ之東によって開発された。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツであり、開発当初は注目されなかったが、白騎士事件と呼ばれる事件によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることになったのだが、宇宙進出よりも飛行パワー・スーツとして軍事転用が始まり、本来の目的とは違ってしまったのだ。そして各国の抑止力の要がISに移っていった。だがこのISには一つの欠陥があった。それは女性にしか動かせないのだ。それがISの常識で、それが原因でこの世界は女尊男卑の世の中になってしまった。だがそんな中、例外がいたのだ。

そしてここはIS学園。アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成

用の特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はこの学園で育成される。ISを除けばなんで変わりの無い学校であったが、その中の1—1のクラスは違っていた。

「……こ、これは想像以上にキ、キツイ」

そう小さく呟いたのは織斑一夏。今日からこのIS学園に通う事になった男である。一夏は周りの女子の視線を感じて、少し青ざめていた。

(……だが、あの人に比べたらまだマシなのかもしれない)

そう思っていると、1人の女性が入って来た。

「えーと、み、皆さん入学おめでとう。わ、私は副担任の山田真耶です」

『……』

真耶はそう言ったが、クラスは無反応であった。

「き、今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。では自己紹介してください。じゃあ、織斑君!!」

「は、はい!!」

一夏は呼ばれ、少し気が抜けており、少しタジタジになっていた。

「え、えーとお、織斑一夏です!!よろしくお願ひします!!」

「……そ、それだけかな?」

そして一夏は周りの女子達からの期待の目を向けられ、少し考え

「……以上です!! 『ガツゴン!!』 アダツ!!?」

一夏は拳骨を受けた。……まあ、鉄を殴った音が聴こえたが、当然人から鳴る音では無い。

「げえつ、関羽?! 『ガツゴツウン!!!』 ボゲ!?!?」

再び鉄を殴った音が聞こえた。さつきよりも鈍い音が聴こえた。

「誰が三国の英雄か、馬鹿者」

溜息を吐きながら、言ったのはこのクラスの担任の織斑千冬である。

「あ、織斑先生。会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

そう言つて千冬は教壇に上がった。

「諸君!! 私が担任の織斑千冬だ!! 君達新人を一年で使い物にするのが仕事だ」

そう言つた瞬間

『『キヤーーーーーー! 千冬様、本物の千冬様よーーーーー!』』』

教室内に大きな声が響き渡つた。それからは女子達のテンションはマックスになつた。

「カッコいいー!!」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に北九州から来たんです!!」

「私お姉様の為なら死ねます!!!」

「まったく毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるな。いや、私のクラスに集めているのか」

鬱陶しそうに千冬は溜め息を吐き、一夏の方を向いた。

「で、お前はマトモに自己紹介も出来んのか?」

「いや、千冬姉、俺h「織斑先生と呼べ」グベボ!」

さつきまでの会話で織斑という苗字と今のやり取りでクラスの女子は千冬と一夏が姉弟であると分かった。

「まさかとは思ってたけど織斑君って千冬様の弟だったんだ」

「つてことはISを動かせるのもやっぱり?」

「でも、じゃああの人はどう説明するの?」

今度はヒソヒソと話を始める女子達。それを意にも介さず千冬は声を張り上げる。

「静かに!!諸君らには半年でISの基礎を身に付けてもらおう!!その後の実習だが、基本動作も半年で身体に染み込ませろ!!良いな!!ここでは、はいかYESしか受け取らないな?」

『『はい!!!織斑先生!!!』』





## 第二話 I Sとも意思疎通出来るみたいだ

そもそもの話何故陽介がI S学園にいるのか？それは2週間前の事。

（2週間前）

某アパートに陽介の甥であるたかふみとゆつくりしていた時の事。

「あつ、もうこんな時間!!おじさん行くよ!!」

「行くって・・・何処に？」

「市役所だよ!!」

「あーI Sの検査か」

これより1週間前、織斑一夏がI Sを動かした事により、全ての男性の中でもI Sを動かせる者がいるかもしれないと言う事で全国で検査が行われていたのであった。

「しつかし、わざわざこんな事するかね」

「言っても仕方ないよ。さっさと終わらせようよ」

「そうだな。でもI Sってロボだよな？」

陽介はたかふみにそう言った。

「ロボばいけど、あれは。パワードスーツみたいだよ」

「パワードスーツか・・・」

そう呟くと陽介は少し笑みを浮かべた。

「どうしたのにおじさん。なんか嬉しそうだけど？」

「いや、でもこういうパワードスーツって何か興奮するだろ」

「そりゃあ、カッコいいもんね!!」

そんな会話をしながら歩いていると市役所に着いた。既に行列が出来ていて、たかふみとおじさんは列に並んだ。それから数分後、たかふみと陽介は調査員に呼ばれた。

「次の方どうぞ」

「はい!!（目覚めろよ!!俺の中の何か!!）」

たかふみは期待してISに触れたが、当然反応しなかった。

「協力ありがとうございます。次の方どうぞ」

「は、はい（まあ、知ってたけどね）」

たかふみはガッカリした。次は陽介の番となった。

「ようやくか。さっさと終わらせてサターンで何かやるか」

そして陽介がISに触れた瞬間、ISは光り輝き、陽介に反応した。

「う、嘘!？」

「馬、馬鹿な!? 織斑一夏に続き、2人目が!」

「す、すごいよ!! おじさん!!」

調査員の2人の女性とたかふみは驚き、周りもざわつき始めた。一方陽介は

「あ……何々? ……喋れるのか?」

I Sに喋り掛けていた。

「……だいたいこう言うロボの声って無機質な感じだと思っていたが、意外と可愛い声してるんだな」

「お、おじさん!? もしかしてI Sと会話できてんの!」

たかふみは驚いていた。それに対し、陽介は頷いた。

「ああ、どうやら俺はI Sとも意思疎通出来るみたいだ。ん? ……褒められるのが初めてなのか? それは今まで誰とも会話が出来なかったからじゃ無いか? いい奴? いやいいマシンか? ……面白い人? やだなー、おじさんはただのセガが好きな色々と経験が豊富な普通の人だよ」

(めっちゃ会話してる!! おじさんまさか!! 万能話手が発動したの!?)

ワイルドトーカー

万能話手それは陽介が異世界グランバハマルに転移した際に神から与えられた力である。能力は翻訳である。パツとしない能力だが、この力は生物や精霊と言った神秘的な者とも話す事が出来るのだ。一部の人しか知らないが、I Sには人格があると言われて

いる。万能話手によって陽介はI Sと喋る事が出来たのだ。

「セガって何だって？セガはな人生の教科書なんだよ!!おじさんの人生はほとんどセガに助けて貰ったからね!!いいよセガは!!!」

(I Sにセガを教えている!?!てかセガは人生の教科書とか言ってるのおじさんだけだからね!?)

たかふみは心の中で盛大にツツコミを入れた。それから何やかんやあって、陽介はある兎さんによって色々と事が運び、I S学園に入学していたのだ。

## 第三話 国の代表みたいなやつじゃ無いのか？俺も全く知らんけど。

自己紹介が終わり10分休憩に入って一夏は勇気を搾り出し、陽介に話し掛けた。

「あ、あの!!」

「ん？えーと、君は織斑君だったかな？」

「は、はい!!お、織斑一夏です!!」

ちよつと戸惑っていた。それに対して陽介は一夏を落ち着かせた。

「少し落ち着け。さっきも言ったが、俺は嶋寄陽介だ。これからよろしく」

そう言つて、陽介は一夏に手を差し出した。

「よ、よろしくお願いします!!あ、後出来れば俺の事は気軽に一夏つて呼んでください」

「なら、俺の事は陽介でも、おじさんとでも、好きに呼んでくれ。一夏君」

一夏と陽介は握手していた。それからチャイムが鳴り、授業が始まったのだが、一夏は入学前に貰っていたISの基礎知識の本を捨ててしまい、その事を千冬に怒られて1週間で覚えるように言われ、落ち込んでいた。

「大丈夫か一夏君？」

「は、はい。．．．でもこれを1週間か．．．ハア」

一夏は溜め息を吐いた。

「俺も所々、覚えて無い所があるから手伝うよ」

「本当ですか!?!ありがとうございます!!」

「いちいちお礼しなくていいって」

そう話していると、2人に誰かが話しかけて来た。

「ちよつとよろしくくて？」

「ん？」

「まあ!?!何ですの!?!私に話しかけられるだけでも、光栄なのですから、それ相応の態度と  
言うものがあるのでは無いかしら？」

「は、はあ」

(何か面倒くさいのが来たな．．．)

一夏は少し戸惑い、陽介は面倒くさい奴だなと思いつつ来た、高圧的な少女を見た。

「普通自分から言うかそれ?とと言うか、俺達はお前の事を知らないし」

陽介が文句を言うと少女は机を叩き、陽介達に言った。

「私を知らない!?このセシリア・オルコットを!?イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を!」

「知らないし、あと質問いいか?」

一夏はバツサリと知らないと言って、セシリアに質問していた。それに対して、セシリアは少しイラつきながらも

「し、知らない!?!ま、まあ、所詮庶民ですわね。ですが、許しましょう。それに庶民の要求に答えるのも貴族としての務めですわ。よろしくてよ!」

「じゃあ、代表候補生って何?」

『『ズツゴオ!!!?』』

周りにいたグラスメイトはズツこけた。その質問にセシリアもワナワナと震えていた。

「多分だけど、国の代表みたいなやつじゃ無いのか?俺も全く知らんけど」

「あー、成程」

陽介の言葉に一夏は納得していたが、セシリアが改めて言った。

「そう簡潔にしないでくださいまし!!全く日本の男性は皆これほどまでに知識に乏しいのかしら!?!常識ですわよ!!」

するとセシリアは誰が頼んでも無いのに説明し出したのだ。



「国家代表 I S 操縦者の候補生として選出されるエリートの事ですわ!! 単語から想像すればわかるでしょ」

「成程」

一夏と陽介は理解したように頷く。

「そうエリートですわ!! 本来なら私のような選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡!! 幸運なのですよ!! その事をもう少し理解して頂ける?」

「そ、それはラッキーだな・・・おじさん、普通自分から言いますかね?」

「相当の自信がある様に見えるちゃ、見えるが」

「隠そうとせずにズバツとした2人に対してセシリアは鋭い目を向けた。

「・・・馬鹿にしてるかしら?」

「いや、自分から幸運って言ったじゃないか」

一夏はセシリアが言った言葉をそのまま返した。

「だいたい、何も知らない癖に、よくこの学園に入る事が出来ましたね。男で唯一操縦できる方達と聞いていたのに期待外れですわね」

「いや、俺達に期待されても、困る」

「でも私は優秀ですから、貴方のような人間にも優しくして上げますわよ。まあ、解らない事があれば、泣いて頼まれれば教えて差し上げてよろしいわよ。何せ、私は入試で

唯一教官を倒したエリートなのですから!!」

セシリアがそう自慢げに言った瞬間の事。

「俺も教官を倒したぞ」

「ハア!?!」

「え、マジで!?!凄いな!!」

一夏の発言にセシリアはあり得ないと言う表情で、陽介は単純な表情で驚いていた。

「倒したと言うか、突っ込んで来たのを避けたら、勝ったんだけどな」

「何だ。戦って勝った訳じゃなかったんだな」

陽介は少し興奮したが、すぐに戻った。

「わ、私だけだと聞きましたが・・・」

「それって女子だけって言う、オチじゃ無いのかオルコツトさん」

陽介の的確なツツコミにセシリアは少し動揺した。そんな状態を無視して一夏と陽

介は話し合っていた。

「おじさんは勝てなかったんですか?」

「いやー。惜しい所まで行けたんだけどなく。最終局面で、相手が、自爆紛いの水蒸気爆

発でやられちゃったからな。次は絶対に勝つけどな」

# 第四話 貴様、セガを馬鹿にしたな!! 望み通り決闘してやる!!

次の授業が始まろうとしたが、その前に千冬がクラスに向けて言った。

「授業を始めるが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけではなく、生徒会の会議や委員会の主席など、まあ、クラス長と考えても良い」

(何か面倒くさそうだな)

陽介は嫌だなと思っている。

「自薦、他薦は問わない。誰かいないか?」

千冬がそう言うのと、

「はい!! 織斑君を推薦します!!」

「え!?!」

「私もそれでいいと思います!!」

「お、俺!?! ちよ、おじさん!!」

一夏は陽介に助けを求めたが、

(すまん一夏君。俺はやりたく無いんだ)

目を逸らした。

(おじさんの薄情者!!!)

陽介は自分は絶対に推薦されないと思っていたが、

「他に誰かいないのか？」

「はい!!嶋寄さんがいいと思います!!」

「な、何?」

突然の推薦に陽介は驚いていた。

「いいと思いますー!!」

「私もおじおじに一票!!」

「俺も選ばれたか・・・おじおじか・・・あだ名良いな」

陽介はのほほんとした子のあだ名に嬉しそうにしていた。

「織斑と嶋寄の2人で良いのか？」

「ちよ、ちよと俺はそんなn「納得いきませんわ!!」

するとセシリアが立ち上がって言った。

「その様な選出は認められません!!男がクラス代表者なんていい恥晒しですわ!!このセ

シリア・オルコットにその様な屈辱を一年か味わえと言うのですか!？」

(「そこまで言うなら自分で推薦すれば良いのに」)

2人はそう思った。

「だいたい文化としても後進的な国に暮らさないといけない自体、私にとっては耐え難い苦痛で」

「だったら、出ていけば良いじゃ無いか」

「何ですって!？」

「一夏君!？」

一夏が少しキレ、セシリアに反論した。

「だいたいイギリスだって、大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「なっ!?!イギリスにだって美味しい料理は沢山ありますわ!!貴方私の祖国を侮辱する気なの!?!」

「侮辱する気なの!?!」って言うてるが、最初に馬鹿にして来たのはそっちだろ!!」

「買い言葉に売り言葉である。」

「決闘ですわ!!」

「おう!!良いぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「わざと負けたら私の小間使い、いえ奴隷にしますわよ!!」

その時だった。

「そこまでだ!! 2人とも!!」

「!?!」

ヒートアップしていた2人を止めたのがいたのだ。陽介である。

「一夏君。たかが、国を馬鹿にされたぐらいでそこまで怒るな。こんな事で怒ってたら、キリがないぞ」

「でも、おじさん!!」

「言いたい事は全部相手に言わせておけば良いんだ。自分や友達、家族を馬鹿にされたりしたら怒っても良い。だがそれ以外は全部無視すれば良い。それに下手に反論したら余計に相手を調子付かせてしまう。じつと我慢するのが良いさ」

陽介は過去の学生時代に学んだ事を一夏に教えていた。

「・・・分かった」

「それとオルコツトさん!!」

「な、なんですの!?!」

陽介はセシリアの方を向いた。

「お前は、候補生であっても、代表として選ばれてここにやって来たのだろうか? なら代表

が国辱を公の場でするのは一番やっちゃあダメな事だ」

「!!?」

「周りの人を見ろ、皆オルコットさんに怒りの目で見ています」

セシリアはクラスメイトから嫌な目で見られていた。

「俺は気にしてはいませんが、後で皆に謝っておいた方がいいぞ」

だが、セシリアは陽介に逆ギレしてしまった。

「知った風な事を言わないでください!!男の癖に私に説教など10年早いですわ!!それにセガと言う聞いた事もない物の事を好きなどと言う物好き「貴様今何と言った」ツ!!?」

セシリアの言葉に陽介は身体なら赤色のオーラを出しながら、怒りの目でセシリアを見た。陽介の怒りにセシリアは尻餅をついた。

「貴様、今セガを馬鹿にしたな!!望み通り決闘してやる!!完膚なきまでに潰してやる!!」

覚悟しておけ!!」

「ヒィ!?!」

「おじさん!?!」

『!?!!』

一夏とクラスメイトは陽介の怒り驚いているのと、陽介の国を馬鹿にされる程度で怒るのは違うと言っていたのに、ゲームを馬鹿にされ怒っている事に驚いていた。そして

セシリアは無理をしながら、陽介に挑発していた。

「え、ええ!!勿論ですわ!!その首洗って待ってなさい!!」

「・・・話は纏まったな。勝負は1週間後に第3アリーナで行う。オルコツト、織斑、嶋寄はそれぞれ準備をしておくように。さあ、授業を始めるぞ!!」



## 第五話 君と出会えたのは運命だな。

セシリアとの決闘が決まってから数時間後、辺りは夕日に包まれ放課後になっていたが、教室内には一夏と陽介が居て、I Sの基本知識を学んでいた。

「き、今日はこれぐらいにしておくか・・・」

「そ、そうですね・・・」

2人はヘトヘトになっていた。

「やっぱ、俺おじさんだからな昔に比べて覚える事が苦手になってきたな」

陽介が自分の老いの事を言っていると、副担任の真耶が教室に入ってきた。

「ああ、織斑さんと嶋寄さん!!まだ教室にいたんですね。良かったです」

「山田先生、どうしました?」

陽介がそう言うと、真耶は申し訳なさそうな表情をして2人に言った。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「寮の部屋が決まった?」

「あの。一週間は自宅からの通学じゃないんですか?」

一夏がそう質問するとそれに答えのは千冬であった。

「事情が事情だ。無理矢理だが、寮の部屋割りをこちらの方で決めた。決定事項だ」

「ま、マジかよ!? それじゃあ、荷物は「荷物なら、私が手配した。ありがたく思え」…」

一夏は千冬が持つて来たバックを受け取ったが、文句を言っていた。

「まさかと思うけど、俺の部屋に入ったのか!? ちよつとひどいんじゃないのか千冬姉!?

「織斑先生だ!!」ペぎゅ!!」

千冬に殴られ、頭を抱える一夏。そして次に千冬はダンボールを陽介に渡した。

「これがお前の荷物だ。後で甥に礼を言っておけ。後これが部屋の鍵だ」

「・・・分かりました」

2人は荷物と鍵を持つて一年の寮に向かった。

それから2人は寮に着き、それぞれの部屋に向かった。

「えーと、お!! 此処だな」

陽介は扉を開け、部屋に入った。

「おお!! 中は綺麗だな、それに広い!!」

陽介は通路側のベッドに腰掛け、ダンボールに入っている荷物を取り出した。

「下着と洋服、おお!!セガサターンとソフト!!!ん?手紙?」

ダンボールの中には生活必需品とセガサターンとソフト、手紙が入っていた。

「おじさんへ、ダンボールの中に洋服、下着、充電器、セガサターンとソフトを入れています。2度目の学生生活を楽しんでください。後生存確認の為、3日に一度は連絡下さい。たかふみより」・・・ありがとうたかふみ」

すると部屋の扉が開き、この部屋の同居人が入って来た。

「あっ・・・」

「ど、どうも・・・」

同居人は、眼鏡に水色髪の少女。更織簪である。最初は戸惑っていた簪であったが、陽介のダンボールに入っていたセガサターンを見て何かを試すかの様に陽介に質問していた。

「・・・ソニツクの本名は?」

「!!・・・ソニツク・ザ・ヘッジホッグ」

陽介が答えると今度は簪に向けて質問した。

「テイルスの本名は?」

「一般的にテイルスが本名と誤解されているけど、本名はマイルス。テイルス。パウワー」

簪が答えると再び、静かな時間が流れ、

「・・・ガーヒー」

「ガーディアンヒーローズ」

「・・・」

2人は掛け合い声をして見つめ合い、握手した。

「君と出会えたのは運命だな。俺は嶋寄陽介だ。陽介でも好きな方で呼んでくれ」

「私は更織簪。簪って呼んで。よろしく陽介」

陽介はこの学園で初めての友達を得た。すると簪は自分のバックからセガサターンと、とあるソフトを取り出した。

「此処、大きいテレビ画面があるの。せっかくだからやらない？」

「これはザ・ハウス・オブ・ザ・デッド!!でもこれ、アレないと難しいぞ」

陽介がそう言うのと簪は可愛らしいドヤ顔で取り出した。

「勿論ちゃんとあるよバーチャガン」

「おお!!じゃあやるか!!」

その夜、陽介は簪と一緒にゲームをして楽しんでいた。一方の一夏は幼馴染の篠ノ之箒に殺されかけていた。

第六話 バーチャロンはロボットゲームのジnkスを打ち破ったんですよ!!

次の日、陽介は友達達の簪と朝ご飯を食べていたが、簪は一夏の姿を見ると不機嫌になり、サツサと食べて部屋に戻った。陽介はその姿に不思議に思った。それら陽介も準備をして学校に向かった。それから授業が始まろうとしたが、千冬は一夏に言った。

「織斑、お前のISだが、準備まで時間が掛かるぞ」

「え?」

一夏は何のことかさっぱり分かっていない様子だ。

「予備の機体がない。だから、学園側で専用機を用意する」

千冬の発言に周りにはざわ付き始め、一夏と陽介は不思議そうに周りを見ていた。「専用機があるってそんなに凄い事なのか?」

すると誰が呼んだでも無いのにセシリアが2人の前までやって来た。

「うわ」

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表の決闘の勝負は見えていますけど、流石に

私が専用機、貴方達が訓練機ではフェアではありませんものね」

自慢そうにそう言うのとセシリアに一夏は質問する。

「なら、お前もその専用機つてのを持っていてるのか?」

「ええ。勿論ですわ!!この私セシリア・オルコットはイギリス代表候補生。常に現時点で専用機を持っていらつしやるの!!そもそもISは世界に467機・・・全世界において専用機を持っているのはエリート中のエリートですわ!!」

その言葉に陽介ついポロツと言った。

「467機しか無いのか?」

「そうなのよおじさん。ISに使われているコアつて言う技術は開示されてないの。467機のISコアを作ったのは篠ノ之束博士だけなのよ」

そう答えたのはクラスメイトの1人の女子であった。

「篠ノ之・・・?ああ、一夏の幼馴染のか」

陽介は何と無く思い出した。続けて女子の説明を聞いた。

「更にISコアは完全なブラックボックスで、篠ノ之博士以外は誰もコアを作れないんだから。国家、企業、組織機関では割り振られたコアの研究と開発訓練を行うしか無い状況なのよ」

「ハア―成程」

陽介は何と無く理解した。

「本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属してなければ与えられ無いが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集の目的の為、専用機が与えられた。分かったな織斑」

「は、はい!!」

一夏は返事をして、陽介は

「そんなに凄い物だったのかこれ」

腕に付けていた空色のプレスレット型のIS待機形態を見ていた。

「な!!?ま、まさか、貴方もすでに専用機を持つていらしゃるの!?!」

「ああ」

セシリアは驚いていた。そこに一夏が陽介に質問した。

「専用機を持つているって事はおじさんは何処か企業に属しているんですか?」

「いや、これは束がくれた物なんだ」

『『『……えええええ!!?!』』』』

陽介の発言にクラスに驚きの声が響き渡った。そしてセシリアは陽介に追求した。

「ど、どうやって篠ノ之博士からISを貰ったんですか!?!」

「どうって……束の方からやって来て俺の要望を聞いて作って、俺にくれたんだよ。そ

の後、携帯を新しくしたり、メアドも交換したりして、色々とやったぞ・・・まあ、代わりに指輪をあげただけだな」

『『……』』

クラスメイトはおじさんを凄いと思った。それから6日後、一夏と陽介、そして何故か着いて来た箒が第3アリーナのIS射出場にいた。

「なあ、箒。ISの事教えてくれるって言ってたよな？」

「……」

「おい!!目を逸らすな!!」

一夏はこの6日間、箒の剣道の修行しかやっていなかったのだ。すると管制塔にいると千冬の声が聞こえた。

『嶋寄。織斑のISはまだ届かない。その為、お前が先に出ろ。良いな?』

「分かりました。来い!!空!!」

【了解しました。マスター】

陽介がそう叫ぶとブレスレットから内蔵している粒子化されたISが放出、その粒子は陽介は包み、ISを装備した。今のISは大体が絶対防御と呼ばれるシールドフルスキャンに守られる為、身体の装甲は少ないの多いのだが、陽介のISは昔に作られた全身装甲である。更に陽介はISのコア人格の空とも、打ち解けあっているので、喋る事が出来る。



表向きは高性能のAIとなっている。青と白が多めの色合いで、頭の部分にはバイザーが付けられており、セガユーザーや、ロボットマニアなら誰でも知っている傑作ロボットゲーム、電脳戦記バーチャロンの機体テムジンそのものであった。

「いつ装備してもやっぱりカッコいいなテムジンは!!これぞヒーローって奴だな!!」

【ご機嫌で、何よりですマスター】

陽介は最高に興奮している。

『しかし、嶋崎さんのISって独特ですね。昔の全身装甲なんて』

「山田先生、何って事を言うんですか!?!バーチャロンはロボットゲームのジnkスを打ち破ったんですよ!!」

『そ、そうですか』

真耶は陽介のバーチャロンに対する熱意に少し引いていた。

## 第七話 この I S をテムジン を舐めるなよ

I S を装備した陽介はカタパルトの発射台に足に乗せた。

「じゃあ、行ってくる」

「頑張ってください、おじさん!!」

そしてカウントダウンが鳴り始めた。

「気合い入れて行くぞ空!!」

「ええ、勿論。マスターとセガをバカにしたコロネ女を叩き潰しましょう!!」

「嶋寄陽介行くぞ!!」

カタパルトが発射され、陽介は I S のフライトシステムを使い、アリーナの上空に止まった。既に陽介の目の前には、I S を装着しているセシリアが居た。そしてセシリアは陽介に挑発をかました。

「最後のチャンスをおげますわ」

「何だ?」

「私が一方的な勝利を得るのは決定されていますわ!! それに今では古いとされる全身装

甲などで私に挑もうなど、片腹痛いですわ!!でも、今此処で謝ると言うのならば、許してあげる事も無くてよ!!」

「断る。お前に謝る言葉など無い」

陽介はセシリアにそう言った。すると空が陽介に警告していた。

【警告!!マスタァ、相手が射撃モードに移行。狙われています】

(早速か・・・空、武器を頼む)

【了解しました】

「そうですか。それは残念。では」

そして次の瞬間セシリアは

「お別れですわね!!」

手に持っていたビームスナイパーライフル『スターライトmkIII』を陽介に照準

を合わせ、ビームを放ったが、

ピッキンン!!!

「なっ!?!」

「悪いが、すぐにはやられないぞ」

陽介は空の武器、可変型の多目的ビームランチャー『スライプナー』東カスタムを装

備し、ソードモードのブリッツ・セイバーに変化し、セシリアの放ったビームを弾き飛

ばした。

「そ、そう来なくては面白くはありませんわ!! さあ、踊りなさい!! 私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで!!」

セシリアは陽介にビームを連射しているが、陽介はスラスターを吹かせ、ギューイイイインソンと凄い音を立たせながら、避けていた。

「は、速い!?! ですが、ただ避けてるだけ!! それに近距離格闘武器で私に挑もうなど、失笑!!」

セシリアのその反応に陽介はほくそ笑んだ。

「・・・すまないが、誰が近接武器しか持つて無いと言った?」

陽介はブリッツ・セイバーをガンモードのニュートラル・ランチャーに変更してセシリアに向けてビームを2発打ち込んだ。セシリアは不相打ちを受け、1発目はモロに受けてしまったが、2発目は被弾はしたのも、咄嗟に避けたので、肩アーマ部分が少し損傷した程度で済んだ。

「くっ!?! や、やりますわね!!」

「言っておくが、この武器は近距離、中距離、遠距離、どれでも行ける男のロマンが詰まった武器だ。セシリア・オルコット、この I S を、テムジンを舐めるなよ」

「マスター、テムジンでは無く空です。間違えないでください」

カッコいい台詞を言った陽介に空は冷たいツツコミを入れた。

「・・・貴方が、そこそこやれる事は認めましょう。それにこのブルー・ティアーズを初見にしてここまで耐えたのは貴方が、初めてですわ。褒めて差し上げますわよ」

「・・・」

「あら無視ですか？それも良いでしょうでは、そろそろ終焉フィナーレと参りましょう」

セシリアは4機のビットを展開して、陽介に向かって攻撃し始めたのだ。

「チツ!!邪魔だな、まさかファ○ネルもどきを使ってくるとは」

「ですが彼女、ビットは使い慣れていますが、同時には動けない様ですね」

「そうか。ならこっちもちよつと出すか。闇の精霊よ。汝この武器に纏い、その姿明らか

に現せ」  
陽介はスライプナーに闇の魔法を纏わせた。陽介は自分に向かって攻撃するビット本体を斬らずに、その後ろの空間を斬った。

「あら、外れましたわVえ!？」

するとビットは突然反応が切れ、そのまま地面に向かって落ちてた。

「やっぱりか。詳しくは分からないが、電波か何かで操っていたな」

そして陽介は慣れた感じでビットを落として行き、そのままセシリアに突っ込んで行った。最初は焦ったセシリアだったが、まだ切り札は残しているのだ。

「残念ですけど、ビットは後2機ございますのよ!!」

セシリアは腰アーマーからミサイル型ビットを発射したが、

「甘い!!」

「キャアアア!!め、目眩し!!」

陽介はミサイルが発射されたと同時に、束が作ったオリジナルパワーボム『ライト&ボンバーボム』を投げたのだ。名前の通り、爆破攻撃と目眩しの効果があるボム。目が見えなくなつたセシリアは大きな隙が出来ていた。

ギユギユイイインンン!!ギユギユイイイインンン!!ギユギユイイイインンン!!

「!」

更に目の見えない状況でスラストの激しい音だけが、聞こえるのだ。それは攻めて来る合図。セシリアにとっては恐怖でしか無い。

「終わりだ」

その言葉が聞こえた瞬間、セシリアはブリッツ・セイバーで斬られまくられた。

「キャアアアアア!!?!」

「駄目押しだ!!」

陽介はトドメと言わんばかりに銃身が2つに分かれ、巨大に変形した砲門形態。『ラジカル・ザッパー』に変形したのだ。

「え．．．．．」

目眩しが解けたセシリアが見たのは変形したラジカル・ザッパーが目の前にあり、ほぼゼロ距離でビームを放たれた瞬間だった。セシリアはビームに吞まれてしまい、悲鳴などあげる暇など無かったのだ。セシリアはアリーナの地面に叩きつけられ、その衝撃でクレーターが出来た。当然、ISのシールドエネルギーは無くなり、ISは解除され、セシリアは気絶していた。

『し、勝者 嶋寄陽介!!』

この戦いを制したのは陽介であったが、この戦いを観ていたクラスメイトはこう思った。『これ、やり過ぎじゃない?』と

## 第八話 セシリアはおじさん恐怖症になったのだ。

セシリアとの戦いが終わり、それから数十分後、今度は一夏と戦う事になった。2人は既にアリーナの上空に居た。

「・・・おじさん。ひとついいですか？」

「何だ一夏君」

一夏は陽介に質問していた。

「さっきのセシリアとの戦い・・・あれやり過ぎじゃないですか!？」

「え!?!でも、あれでもまあまあ手加減した方なんだけど・・・」

陽介は手加減した状態だと一夏に伝えると、

「いや、あの戦いを見て、とても手加減していた様には見えないんですけど!?!見ていて、怖かったですし、後ドン引きしてますよ!?!これからおじさんと戦いますけど・・・」

一夏の強烈なツツコミが炸裂した。それに対して陽介は

「大丈夫、大丈夫!!ちゃんと手加減するから。オルコットの時はセガを馬鹿にされたから少し力が入っちゃっただけだから」



「本当ですか!?俺まだ死にたく無いですよ!!?」

そう会話していると、ブザーが鳴り、試合が始まった。最初に攻撃を仕掛けたのは一夏である。IS『白式』の武器、近接特化ブレード『雪片式型』を構え、陽介に斬り掛かった。

「おおおお!!!」

「ブレードか・・・ならこつちも!!」

『スライプナー』をソードモードのブリッツ・セイバーに変化して一夏の攻撃を防御した。

「やっぱり剣道をしてたから、剣筋はいいな」

「それはありがとうございます」

「でも、速さが足りない!!」

ブリッツ・セイバーで雪片式型を弾き飛ばし、スラスタを吹かせ、体当たりをお見舞いした。

「うわああ!!!?」

「どうした?!そんなものか?」

そこから陽介は全身を回転しながらドリルの様なキックで攻撃したのだ。

「葉呀龍!!」

「グワアアア!!」

一夏はモロに喰らってしまい、シールドエネルギーは全体の3分の1減ってしまっ  
た。一方その頃、アリーナの観客席では、

「本音見て見て!!葉呀龍だよ!!影丸の必殺技!!」

「ほんとだー!!凄いおじおじ!!」

クラスメイトの本音と同室の簪が興奮していた。特に簪はヒーローを見ているかの  
様に目をキラキラしながら、陽介を見ていた。当初、この戦いを見るのはあまり乗り気  
では無かったが、陽介のIS『空』の外観を見た際に最高潮に興奮していたのだ。そし  
て場面は戻り、優勢な陽介に一夏は賭けに出た。

「一か八かやってみるか!!」

一夏は雪片式型を構えると、雪片式型は白い光を纏い、ブリッツ・ブレードと斬り合  
いになった。すると空が陽介に警告していた。

【大変です。マスター!!】

「どうした空!？」

【シールドエネルギーが減少してってます!!】

「何だと!？」

白式の単一使用能力『零落白夜』は相手のISのシールドエネルギーを急激に減らす

能力がある。ただし、この能力が発動している最中は自身のシールドエネルギーも消費する諸刃の剣である。

「こうなったら・・・」

「なっ!!!」

陽介はブリッツ・ブレードを手放し、その光景に一夏は驚き、隙が生まれてしまった。陽介は左手を一夏に構え、そこに魔法陣が発生した。

「風の精霊よ。汝風の弾となりて、敵を吹き飛ばせ」

「うわああアアア!!!」

一夏は突風に吹き飛ばされ、アリーナの壁に激突したのだ。それと同時にシールドエネルギーがゼロになった。

『勝者 嶋寄陽介!!』

陽介は一夏の元まで来ていた。

「やるな、一夏君。少し本気を出しちゃったよ」

「あ、いえ。おじさんこそ強かったですね。・・・まだまだ弱いですね」

「そんな事無いさ。誰だて最初から強かった訳ではないからな。これから強くなっていけばいいだけさ」

「おじさん・・・」

一夏とおじさんとの仲が深まった。その後、2人はセシリアのお見舞いに行ったが、セシリアはおじさんの姿を見るや否や、

「ヒイヒイ!!許してください!!許してください!!」

「・・・」

カタカタと震え始め、謝り始めた。どうやらおじさんの攻撃やトドメでトラウマを植え付けられたのだ。つまりセシリアはおじさん恐怖症になっただ。それから2人は真耶から専用機ISに関する取り扱いの説明と条約の書かれた分厚い本を貰い、項垂れていたの言うまでもない。後、セシリアは一夏に優しくされてコロツと落とされてたよ。流石チヨロインだ。

# 第九話 やっぱ、おじさんより若い一夏君の方が花があるからね

次の日、一組はグラウンドに集合していた。この日はISの実習授業があったのだ。クラスメイトは全員、IS用のタイツを着ており、千冬や真耶はジャージを着ていた。「これよりISの基本飛行操縦をやって貰う」

『『』はい!!』』

「では、織斑、嶋寄、オルコット。試しに飛んでみる」

「分かりましたわ!!」

「行くぞ!!空!!」

セシリアと陽介は少し集中するとISを装着したが、一夏は

「よし・・・あれ?えーと」

「何をしている?熟練したIS操縦者は展開まで、1秒も掛からないぞ」

千冬に注意され、一夏は深く集中し、ガンドレットに手を当てて叫んだ。

「集中・・・来い!!白式!!」

そうして一夏もI Sを装着した。

「よし、飛べ!!」

セシリア、陽介は難なく飛べたが、一夏は飛べるには飛べているが、フラフラしており、不安定になっている。

『遅いぞ!! スペック上では白式の方が速いぞ!!』

遅い一夏に千冬はインカムで注意されていた。

「そう言われても・・・自分の前方に角錐を展開させるイメージだったけ?・・・よく分からん」

一夏が悩んでいると、セシリアがアドバイスをしてきた。

「イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすい方法を模索する方がよろしくてよ。一夏さん」

「・・・一夏さん?・・・そうは言っても空を飛ぶ感覚が分からないだよ。て言うかどうやって空を飛んでいるんだこれ?・・・おじさん何かコツとありますか?」

陽介にそう聞くと、

「俺はこのスピードなら、『Nights into dreams...』を想像して飛んでいるかな。やはりセガは人生の役に立つ!!」

「そ、そうですか・・・」

あまり、参考にはならなかった。

「その・・・よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ。・・・2人きりで・・・」  
するとインカムから千冬の指示が聞こえた。

『織斑、嶋寄、オルコット。今から急降下、完全停止をやって見せろ』

セシリア、陽介は難なく出来たが、一夏は制御が効かず、そのまま地面に激突して大きなクレーターを作ってしまったのだ。当然、千冬から叱られ、クレーターを埋めていたが、こつそり陽介が手伝っていた。そして授業が終わり、一組は食堂に集まっていた。

『『織斑君!!クラス代表決定おめでとう!!!』』

「・・・何で俺がクラス代表に選ばれてるんだ」

一組は一夏のクラス代表就任パーティーを開催したが、一夏は何故自分がクラス代表に選ばれてるんだと思っていた。その疑問に答えたのは陽介であった。

「いや、クラスの皆にやり過ぎって注意されちゃったから。辞退したんだよ」

「じ、辞退!?!」

「それにクラス代表がいい歳したおじさんじゃあ何か弱いじゃん。やつぱ、おじさんより若い一夏君の方が華があるからね」

「お、おじさん・・・」

その発言に何故か、一夏は悲しくなっていた。すると一夏の所に新聞部がやって来た

り、写真を撮ったりと色々あって次の日になった。入学からすでに約2週間が経ち、一夏や歳の離れた陽介もクラスメイトと打ち解けあっていた。

「もう直ぐ、クラス対抗戦だね」

「そう言えば、2組のクラス代表が変更になったって」

「えーと、何とかって言う転校生に変わったんだよね」

1組のクラス内では話題は2組の転校生の話になった。

「転校生？今の時期にか？おかしなもんだな」

陽介はそう言うのと、

「そうなのよ、おじさん。確か中国から来た子だって」

クラスメイトの発言にセシリアが反応した。

「成る程、私の存在を今更ながら危ないと感じてからの転入かしら」

『『』』

「・・・どんな奴なんだ？」

「ちよつと無視しないでくれませんか!？」

セシリアはクラスメイトからいじられていた。

「でも、専用機を持っているのは1組と4組だけだからね。余裕だと思おうよ」

その時だった。



「その情報古いよ!!」

「ん?」

声のする方を向くとそこには小柄で、ツインテールの女の子が立っていたのだ。

「2組の専用機持ちがクラス代表になったのよ!! そう簡単には優勝出来ないわよ!!」

「・・・鈴? やっぱり、鈴だよな!!」

一夏がそう呼んだ。どうやら、一夏の知り合いであった。

「そうよ!! 中国代表候補生凰鈴音!! 今日には宣戦布告に来たってわけよ!!」

とドヤ顔をしながら、一夏に指を刺していると、後ろから千冬に頭を殴られ、2組に戻って行った。

「随分と元気な子がやって来たな」

陽介は鈴に対し、そう感じていた。

## 第十話 約束を忘れて無いんだろ?それは一夏君は悪く無いぞ

鈴が来てから時間が経ち昼休み。一夏達は食堂に来ており、その途中で鈴と合流していた。

「それにしてもびつくりしたぜ。お前が2組の転校生だったのか。連絡してくれたらよかったのに」

「そんな事したら劇的な再会が台無しになるでしょ」

「そうか?てか、鈴お前まだ、千冬姉の事が苦手なのか?」

「うっ・・・そ、それは」

一夏と鈴が会話している後ろで、箒とセシリアは2人を睨んでいた。陽介はというと（今日は何をしようかな?・・・ラーメンにするか）

昼飯を考えていた。

「てかいつ代表候補生になったんだよ?びつくりしたぜ」

「それはこっちの台詞よ。ニュースで見た時、驚いたわ」

「俺だつてまさかこんな所に入るとは思わなかつた」

すると痺れを切らした箒とセシリアが一夏に詰め寄つた。

「一夏そろそろ説明して貰おうか」

「そうですねよ一夏さん!! そのお方とはどの様な関係ですの!?!」

「どうしたんだ2人とも?」

「すまん一夏君!! 止められんかつた!!」

陽介は一夏に謝っていた。

「どうつて、ただの幼馴染だ・・・どうかしたのか?」

「何でもないわよ。フン」

一夏の幼馴染の発言に鈴は少し機嫌を損ねた。

「丁度、箒と入れ違いに転校して来たんだ。鈴、こつちが篠ノ之箒。まあ、簡単に言うと

箒がファースト幼馴染で、鈴がセカンド幼馴染だ」

「独特な表現だな」

一夏の発言に陽介は静かに突っ込んだ。すると鈴は陽介の方を向いた。

「そう言えば、そこにいるのがもう一人の男性操縦者?」

「ああ、おじさんだな」

「どうも、嶋寄陽介だ。おじさんでも好きな様に呼んでくれ。よろしくなえ」と・・・

凰・・・鈴音・・・合ってるか?」

「鈴で良いわよ。こちらこそよろしくね陽介」

陽介と鈴は握手していた。それから時間が経ち、放課後。一夏はセシリア達による特訓が始まり、やられまくっていた(主に陽介の攻撃により)。一夏はヘトヘトになりが疲れきっていた。

「はあ、これからクラス対抗まで毎日これか・・・」

「まあ、頑張るしかないさ。地道にコツコツな」

「・・・良い感じに言ってますけど、ほとんどおじさんにやられてますからね!!」

そう話していると鈴がこっちにやって来た。

「お疲れ一夏。はいスポーツドリンク。陽介もどうぞ」

「助かる」

「気が利くね。ありがとう」

「どういたしまして」

鈴が2人に差し入れしてくらたのだ。陽介は何とも無く過ごしたのだが、一夏の方は色々と修羅場になっていた。そして次の日の朝、一夏は陽介に昨日の出来事について話し、相談した。

『鈴の料理の腕が上がったら、毎日酢豚を作ってあげる』って約束を覚えてたのに意味

を理解しろって言われて怒られたんですよ。どう思いますかおじさん？」

「そんな深い意味無いだろ。それに約束を忘れて無いんだろ？それは一夏君が悪く無いぞ」

「ですよ。あの後色々考えたんですけど、よくわからなくて」

「……」

そんな会話をしている2人に箒は信じられない物を見るかの様な目になっていた。それと同時に鈴に対し、可哀想と思ってしまった。分かっていると思うが、2人は規格外の朴念仁なのだ。

## 第十一話 俺じゃ無かったら死んできたぞ

鈴との修羅場から1週間後、クラス対抗が始まった。

「・・・」

「か、かんちゃん・・・」

彼女は更織簪。日本の代表候補生であるのだが、専用機を持っていない。その理由は今はまだ説明出来ないが、一夏が大きな原因であるとだけ言っておこう。簪は機嫌があまり良く無かった。

「お待たせ2人ともはい。ジュース。取り敢えずはこれ飲んで機嫌直してくれ」

陽介は缶ジュースを2人に渡していた。

「・・・うん。ありがとう陽介」

「ありがとう。おじおじ」

「おつ、そろそろ始まるな」

アリーナのブザーが鳴り、一夏対鈴の戦いが始まった。最初は鈴のIS甲龍が優勢だったが、試合中盤、一夏は段々と鈴の攻撃を避けていき、逆転間近になった瞬間だっ

た。

バツリイイインン!!!

大きな音と共にビームがアリーナに発射されグラウンドに大きな穴が空いた。

「!?」

その穴から全体が目の様な物が付いた全身装甲の謎のISが現れたのだ。突然の侵入者にアリーナ内に緊急のアラームが鳴り響いた。敵ISは一夏達を相手にしながら、周りを見ており、何故か、簪達に向けてビームを放った。

「本音!!危ない!!」

「かんちゃん!!」

簪はこちらに向かってくるビームを見て本音を庇った。それと同時に死を覚悟したが、一向に痛みが来ない。振り向くとそこには

「・・・たく俺じゃ無かったら死んでいたぞ」

光剣を出していた陽介の姿があった。陽介はISの部分展開はまだ出来なかった故、魔法の光剣でビーム切り裂いたのだ。

「よ、陽介?」

「簪、仏、無事か?」

「う、うん。大丈夫」

「こっちも大丈夫だよ!!」

2人の安全を確認した陽介は安心した。

「そうか2人が無事で何よりだ．．．ちよつと行つてくる。こい!!空!!」

【OKです!!マスター!!】

陽介はI Sを展開し、スラスターを吹かせ、アリーナに向かった。一方、陽介に助けられた2人は

「．．．陽介カッコいい!!」

「おじおじ、凄い!!なんか凄いドキドキする!!」

陽介にドキドキしていた。そしてI Sを纏った陽介は敵I Sの前に現れた。

「おじさん!？」

「陽介逃げなさい!!死ぬわよ!!」

「大丈夫だ。こんな相手に俺は死なん。しかもこいつは無人機だ!!空から教えて貰った」

「「え!？」」

「久しぶりにちよつと本気を出すか!!」

陽介の発言に2人は驚いていた。それと同時に陽介は敵I Sに手を向けていた。そこから巨大な魔法陣が現れ



「炎の精霊よ、汝炎の不死鳥となりて、我が敵を消し炭にしろ!!」

陽介は詠唱すると、無人 I S に炎で出来た不死鳥を出し、直撃させた。その後、大爆発が起きた。

「すげえ……」

「……これが陽介の I S の力……」

2人は啞然としていた。こうして無事無人 I S を倒す事は出来たのだが……

「……織斑先生。敵の消滅を確認出来たのですが…… I S が全て消し炭になってしまったのですが……」

「……」

千冬は軽く頭を抱えていた。

誰も知らない地下の研究所にて兎耳のカチューシャをつけた紫髪の少女がアリーナの戦いを見ていた。

「うわー。一瞬でやられちゃったなあ。よつくん。容赦無いな・・・まあ良いか。いつくんのデータも取れたし、ISの不具合による暴走も止められたから一石二鳥なのだ!!」

少女はそう言つて瞬きをすると目から光が消えていた。

「全くよつくんたら女の子の近くにいて・・・ドウシヨウモナインダカラ・・・キミノイチバンハ、タバネサンナンダヨ♡」

## 第十二話 俺の（友人としての）気持ちだ。

無人ＩＳ襲撃から一週間後、陽介と簪がゆっくりしていると、誰が扉を叩いた。

「今開けます」

扉を開けるとそこには真耶がいた。

「どうしたんですか山田先生。こんな時間に？」

「はい、実は伝えたい事がありました」

「？」

「どうやら陽介に用がある様だ。」

「お引越しをして貰いたくて。ようやく部屋の調節が出来たので、嶋寄さんには部屋を移動をして頂きたくて」

「そうですか・・・今すぐですか？」

陽介がそう言うと言真耶はすぐさま答えた。

「そうですね。いつまでも年頃の・・・かなり歳の離れた男女がいつまでも同室で生活するのは更織さんも嶋寄さんもくつろげないでしょう」

「えっと……そんな事h「まあ、よくよく考えたら、そうですね。ちゃちゃと準備しますよ」……」

そう言って陽介は荷物を纏め、新しい部屋に運んでいた。そして最後にサターンが入ったダンボールを持ってただけになった。

「じゃあな、簪。次の人と仲良くするんだぞ」

「……うん……」

簪の表情はとても悲しそうであった。

「そんな顔するな。別に遠くに行くわけじゃ無いから……あつ、そうだ。簪、左手出してくれ」

「?」

簪が左手を出すと陽介は左手の薬指に指輪をはめた。その指輪は水色のリングで赤紫色の宝石が付いた物である。

「!!よ、陽介!!こ、これって!?!」

「俺の（友人としての）気持ちだ。これは5年に一度しか出現しない赤宝石竜ルビードラゴンの突然変異

種から取った宝石に海でしか取れない海水鉄と呼ばれる特殊な鉄で作った物だ。簪の目の色と髪の毛を見て選んだ。まあ、75円の価値しかないが、良かったら受け取ってくれ」

指輪を付けた簪の表情は

「・・・嬉しい・・・ありがとう陽介。ずっと大切にするよ」

今で見た事のない乙女の表情となっていた。

「そうか？なら良かった。じゃあお休み」

「うん。お休み」

その日簪は今まで以上に安らかに眠る事が出来た。だが陽介は知らないこの行動が  
とんでもない修羅場が起こる事を。そして次の日

「おはようございます!!皆さん、今日はなんと私達のクラスに転校生が来ました!!」

「転校生?」

真耶がそう言うと、扉が開き、教室に入ってきたのは金髪の男?だった。

「どうも、初めまして。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。よろしくお願  
いします」

「こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞き、本国より『『キヤアアア!!!』』へっ?」  
シャルルの挨拶の途中でクラス内から大きな声が上がった。

「男の子よ!!」

「3人目の男子!!」

「守ってあげたくなる系の!!」

シャルルの容姿にクラスメイトは黄色い声をあげていた。その後、千冬に注意され静かになったのは言うまでもない。

## 第十三話 友人として見過ごせない。

朝礼が終わり、陽介達は更衣室に来ており、少し時間があつた為、自己紹介をしていった。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「嶋寄陽介だ。陽介でもおじさんでも好きなように呼んでもいい」

「うん。ありがとう。よろしくね一夏、陽介さん。僕の事はシャルルでいいよ」

「分かった」

そうしているうちに時間が来ており、2人は急いで着替えていた。

「このISスーツ、着る時に裸つてのが、キツいんですよね」

「分かる、分かる。あれが特に引つかかるんだよ」

「ひ、引つかかる・・・」

「？」

シャルルは2人の会話に顔を赤くしており、2人は不思議そうにシャルルを見た。それと同時にシャルルのISスーツに目に入った。

「シャルルのそのスーツ、着やすそうだな何処のメーカー？」

「デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノア？」

シャルルの言葉に何かを思い出そうしている陽介達。

「確か、シャルル君の苗字もデュノアだったな」

「そう。父が社長をしてるんだ。一樣、フランスで一番大きいIS企業だと思う」

その言葉に

「成程社長の息子か・・・道理で気品があつて良い所の育ちつて感じる訳だ」

「・・・そうだね」

一夏の発言にシャルルは一瞬暗い表情になった。しかしその表情を陽介は見逃さなかつたのだ。

（何かあつたのか？）

その後授業が始まり、それから昼休み、放課後の一夏達との訓練などいつものルーティンを過ごし、陽介達は寮に戻っていた。シャルルは陽介と同室になっており、2人は部屋着に着替えてコーヒーを飲んでいる。

「はぁー、やっぱり、男同士つてのは良いな。たかふみと一緒に暮らした時みたいだな」



「たかふみ？」

「俺の甥っ子だ」

「家族なんだ・・・良いな・・・」

シャルルはそう言つてコーヒを飲んでいた。

「美味しい!!良い豆使つてるんだね」

「そうだろ!!中々良い豆がこの前手に入つてな、今度シャルル君にも教えるよ」

そんな会話をして夜を過ぎ<sup>ぎ</sup>していた。次の日、朝礼にて、新しい転校生が来ていた。

「え、えーと、今日も嬉しいお知らせがあります。・・・ドイツから来たラウラ・ボーデ

ヴィツヒさんです」

転校生は灰色のロングで眼帯をつけた少女であつた。

「挨拶をしろラウラ」

「はい。教官」

（(教官?)）

その言葉にクラス一同疑問を思い浮かべている。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

一言だけ言つてその後は黙つたままであり、真耶はおどろおどろしている。やがてその間に耐えきれ無くなつた。

「……ほ、他に言う事は？」

「無い」

そう告げるとラウラは一夏の方に向かって歩き、ビンタをしようとしたが、いつの間  
にラウラの横に移動した陽介に手首を掴まれていた。

「貴様……何のつもりだ!!」

「それはこつちの台詞だ。お前こそ一夏君に何をするつもりだ？友人として見過ごせな  
い」

「貴様には関係無い!!」

「言つたはずだ。友人として見過ごせない。離れろ」

「っ!!?」

ラウラは陽介の殺意の籠った目を見て少し怯え、掴まれた手を強引に振り解き、一夏  
の方を向いた。

「……私は認めない……貴様があの人の弟であるなど……認めるものか!!」

波乱の幕開けである。